

2025年度 授業コード: 12104900

授業科目	文化人類学				実務家教員担当科目	-					
単位	2	履修	選択	開講年次	3	開講時期	後期				
担当教員	永吉 守										
授業概要	<p>文化人類学は、文化の側面から、その多様性と共通点を通して、人間とは何かを探る学問です。特にグローバル化・グローカリゼーションが進む現代では、我々とは異なる文化を持つ人々と日常的に接する状況となっており、文化の違いについて、分断や衝突ではなくいかに共生する方向で折り合っていくか、ということが一人一人に求められています。</p> <p>この講義では、現代社会においていかに異文化理解と多文化共生を図っていくかについて、基本的視座・理論・態度を習得することを目的とします。</p> <p>授業スタイルは講義が中心となりますが、可能な限り写真・動画を含めた映像資料を使用するのみならず、場合によっては外部の専門家の登場も想定しています。また、ワークやディスカッションおよび発表を実施したいと考えており、その形式は柔軟に対応しますので、積極的な発言を期待します。</p>										
授業形態	対面授業			授業方法	ワーク(絵や図を描く作業等)を導入します。毎回、質問・感想を GoogleForms に記入してもらい、質問については(個別回答が必要なもの以外)まとめて次回に「前回の質問への回答」として文書化し、提示します。						
学生が達成すべき行動目標											
標準的レベル	文化に関する基礎知識・理論・事例を理解し、おおよそ説明することができる。また、自らのこととして異文化理解や多文化共生を考え、日常生活の現象との関連に気づき、自分の考えを説明することができる。										
理想的レベル	文化に関する基礎知識・理論・事例を深く理解し、説明することができる。また、自らのこととして異文化理解と多文化共生を考え、日常生活の現象との関連についての的確に文章で説明し、解決を模索することができる。										
評価方法・評価割合											
評価方法		評価割合(数値)				備考					
試験											
小テスト											
レポート		100									
発表(口頭、プレゼンテーション)											
レポート外の提出物											
その他											
カリキュラムマップ(該当DP)・ナンバリング											
DP1	○	DP2	○	DP3	○	DP4	○	DP5	○	ナンバリング	EN31303J
学習課題(予習・復習)										1回の目安時間(時間)	
講義内容を復習し、適宜次回のテーマについて調べ予習すること										4	
授業計画											

第1回	イントロダクション、文化人類学とその周辺学問、文化人類学の歴史
第2回	文化人類学の目的・視点・方法とフィールドワーク・エスノグラフィ
第3回	「社会」の概念・「文化」の概念
第4回	文化相対主義と自民族中心主義
第5回	ことば・衣食住・生業と文化
第6回	「社会」や「文化」の単位(民族集団・エスニシティ・地域・国家)
第7回	家族・親族組織、出自集団、婚姻
第8回	ジェンダー・SOGI の諸相と文化人類学 その1
第9回	ジェンダー・SOGI の諸相と文化人類学 その2
第10回	信仰、宗教、儀礼－死者儀礼と成人儀礼の事例から－
第11回	グローバリゼーションと異文化理解－海外旅行の事例から－
第12回	炭鉱社会の文化人類学(1)－筑豊の女性労働－
第13回	炭鉱社会の文化人類学(2)－三池炭鉱のフィールドワークと社会調査実習－
第14回	多文化共生への道(1)－在日コリアン・ユンヌンチュー
第15回	多文化共生への道(2)－定住外国人－、まとめ
テキスト	なし。必要に応じて資料を配布する。
参考図書・教材 ／データ ベース・ 雑誌等の 紹介	綾部恒雄・桑山敬己(編)『よくわかる文化人類学』ミネルヴァ書房(2025年(第3版)、2010年(第2版)、2006年(初版)) 波平恵美子(編)『文化人類学』(カレッジ版)(2021年(第4版)) そのほか講義中に紹介。
課題に対するフィードバックの方法	質問欄に対する回答を次回の講義資料に添付してフィードバックする。期末レポートについては、個別にフィードバックはせず、15回目に全体的な講評を行う。
学生へのメッセージ・コメント	授業の内容を踏まえて、発表を行い、授業内容を理解し、自らの意見を簡潔に伝達する能力を望む。積極的に映像視聴、ちょっとしたワークをする予定。 これまで、身近で体験した異文化理解の場면을整理するのが望ましい。また、発表に向けて、授業時間以外に準備する必要がある。 日本や外国で起こる社会的な事件や現象について興味を持って取り組むこと。わからないことがあったら、積極的に直接またはWEB フォーム等で質問すると理解が深まると思う。 なお、シラバス上で見る限り「異文化間コミュニケーション」や「比較文化と国際理解」といった授業は本授業の理解に役立つと思われるが、視点や考え方が異なる部分もあり同一の主旨ではないので受講およびレポート作成の際には注意が必要。